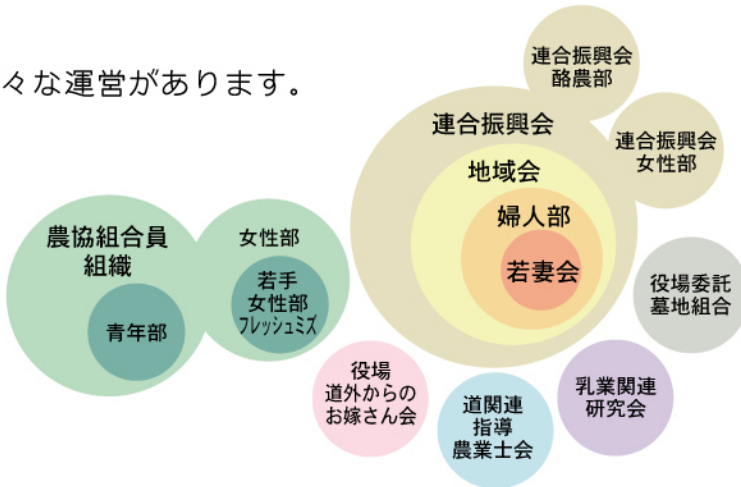
原田牧場 Note

Page 8

原 田　希

田舎には実に様々な運営があります。



私がかかわっているものだけでこれほど！　大阪時代は、住まい周辺の小さい自治会しか関わりがなかったので、これほど大きな自治会（ベージュの部分）が活発に活動しているのには驚きました。住むと同時に所属することになります。それぞれ予算がつき、持ち回りで役員を担当、行事をやって決算書を作り総会まで運営します。墓地組合は役場から委託されて管理や環境整備もやっています。暮らしのことは人任せでなく、自分達でやる意識が強く根付いています。地域会の活動としては、環境整備（草刈り、ゴミ拾い、冬支度、花壇作り）や安全祈願祭、神社祭、そして、地域の方が亡くなった時に葬儀の取り仕切りもやります。ご不幸があった家の方は、雑務は何もしなくていいようになっています。ひとり暮らしの方が亡くなっても、ほったらかされはしません。家の片付けにも班の者が伺います。葬儀の日程や役割を決める会議がすぐにひらかれて、葬儀委員長（挨拶）副葬儀委員長（司会）総務（全体のしきり）会計（御香典の預かりと記帳）まかない（食事）会場（駐車場案内、会場支度）留守番（出払った家を預かる）葬送（火葬場まで行くお世話係）が決まります。葬儀委員長には一番親しい者が選ばれる傾向があります。葬儀の挨拶で故人の経歴を語るのですが、故人の人柄、年長者から聞いた開拓時代の話、地域でどのように活躍してくれたか、家族のエピソード、亡くなるまでどんな風に過ごしたか、得意料理、趣味や楽しみは何だったか、幅広く聞き取り原稿にします。いろんな思い出話を聞くうちに、おのずと感謝の気持ちと、故人が支えてくれた地域をこれからも私達が支えます、という気持ちが沸き上がってきます。
お名前しか知らない御老人の場合もありますが、寒さ厳しく物資もお金もない時を生き抜いた話にこみあげるものがあり、どの葬儀でも泣かされます。酪農仕事もやりながらの手伝いで、少し疲れはしても、みんなで見送るあたたかい葬儀だった、あぁ良かった。という気分に満ちます。

なんやかんやと地域活動に呼び出される、役が何重にも当るわずらわしさは確かにありますが、自分たちで暮らしを補いあって、ルールを守って、いい距離感で見守り合う。
遠くの身内より、近くの他人力の心強さを実感します。昔は頼むところ、お金もなかったから、ご近所の手を借りてやっていたのでしょう。でも今は、地域の人に頼まなくても全部やってくれる葬儀屋がある。にもかかわらず、すべてはお願いせず運営は地域会で。助け合いの精神が廃れず残っている事に奇跡を感じます。頼む方が、忙しいのに悪いな、迷惑かけるなあ、気を遣うなぁ、と言い出したら保てないバランス。お互いさま、いつかはみんなお世話になる、の意味を地域で理解している奇跡。だからわが地域には孤独死はない。火葬に入る直前のお別れの時に、摩周湖の伏流水を飲ませてあげる儀式もわが地域だけの特別な心遣いです。

昔は新しい人たちが地域に入るのを嫌ったこともあったようです。今はお嫁さんは全国から来るし、田舎生活に憧れて移住する方、廃校を利用してお店や工房を開く方、地域おこし協力隊の方もいます。新しい風が吹き込まれた結果、地域が楽しくなったと皆さん感じているようです。その他、ベトナム人実習生もいれば、東京や千葉から農業を学びにきた若者たちもいます。過疎、人手不足に悩む地域の救世主を歓迎して仲間となる。いま取り組むべきはそこだと思っています。一番最初に受け入れる窓口としては若妻会。
昔は若奥さんが、親や仕事の悩み、子育ての話をしながらお茶を飲む会でしたが、今は名前も変わって、有志は誰でも参加していい会になりました。仲間づくりはもとより、地域に根付いてもらう最初の場所。みんなからいろんな話を聞いて、笑って、ここを好きになってもらえれば、と思っています。はじめは気後れしたり、静かに暮らしたいから田舎へ来たのに、わずらわしいと思うこともあるでしょう。若妻会の雑談になんか意味があるのかな、と私も思っていました。でも、自分の一大事、休めない酪農仕事をかかえながらの病気、事故、身内に不幸があった時にかけつけて、なんかやれることあるか？ と言ってくれるのは地域なのです。それを一度でも経験したら、全部の意味がわかります。自然が厳しい分も寄り添って生きていく場所なのです。

最後に、地域に根付いた度チェックを紹介します。
ある日、救急車がサイレンを鳴らして走り抜けて行きました。
大阪から来たばかりの私はなんとも思いませんでした。
知らない誰かに何かあったんだろう、くらいのことです。
ですが、牧場の父は原付きバイクで追いかけていきました。
彼にとっては知ってる誰かのピンチだったのです。地域に
根付いていくとサイレンが自分事のように気になりだします。
何も知らずに、ただの野次馬 なんて言って
すみませんでした、父さん！

筆者　原田　希　ハラダ ノゾミ
1973年 大阪府吹田市生まれ
2006年 酪農家との結婚を機に北海道へ移住 自身も酪農家に
2017年 北海道農業士に認定
北海道指導農業士の夫とともに、新規就農者の支援や
女性の農業者向けの勉強会のお世話係を担当